

各関係機関団体の長 } 殿  
各病虫害防除員 }

福岡県農林業総合試験場長  
(福岡県病虫害防除所)

平成27年度病虫害発生予報第5号(8月)について

このことについて、病虫害発生予報第5号を発表したので送付します。

予報第5号

8月における主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

主な病虫害の発生予報概要

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	いもち病(葉いもち)	多	多	並
	セジロウンカ	少	少	やや少
	トビイロウンカ	少	少	少
	コブノメイガ	少	少	やや多
	斑点米カメムシ類	やや少	やや少	やや少
大豆	ハスモンヨトウ	並	やや多	多
カンキツ	黒点病	並	並	やや多
	ミカンハダニ	やや多	やや多	多
ナシ	ナシヒメシクイ	少	少	並
カキ	炭疽病	少	やや少	並
	フジコナカイガラムシ	多	多	並
果樹共通	チャバネアオカメムシ	少	—	少
茶	炭疽病	少	少	並
	カンザワハダニ	少	少	並
	チャノコカクモンハマキ	少	少	やや多
	チャノキイロアザミウマ	少	少	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	やや多	多
冬春イチゴ (育苗期)	炭疽病	やや少	並	並
	うどんこ病	多	やや多	やや多
	ハダニ類	少	やや少	やや多

\*果樹共通・チャバネアオカメムシの平年比について、現況は年次変動が大きいため前年比としている

<予想される向こう1か月の天候（平成27年8月1日～平成27年8月31日）>

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並、日照時間は平年並か多いでしょう。

週別の気温は、1週目は平年並か高く、2週目は平年並、3～4週目はほぼ平年並でしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低30 並30 高40% ほぼ平年並の見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み

（福岡管区气象台 平成27年7月30日発表抜粋）

作物別発生予報

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、

**「少、やや少、並、やや多、多」の5段階**で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、**少発生（－）**、**やや少発生（－～±）**、**並発生（±）**、**やや多発生（±～＋）**、**多発生（＋）**として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

【普通作物：水稻】

1 いもち病（葉いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並

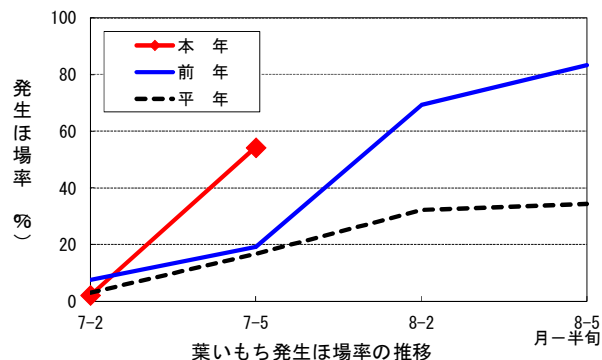
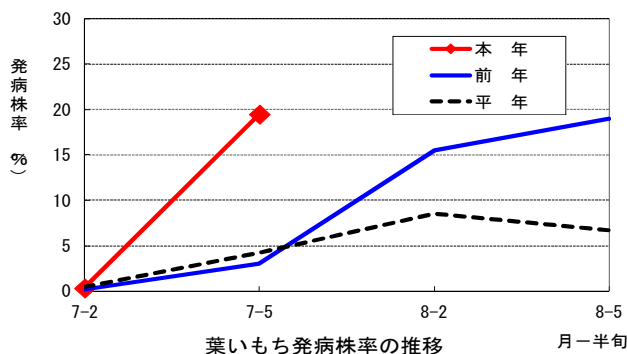
(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（＋）。

発病株率 19.5%（平年 4.3%、前年 3.1%）

発生ほ場率 54.3%（平年 16.8%、前年 19.2%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生状況は地域やほ場による差が大きく、発生株率が50%の多発ほ場が一部で認められており、地域やほ場によって発生状況が大きく異なっているため、必ず本田での発生状況を確認する。

特に、育苗期に本病が発生した地域では注意する。

イ 本病原菌は孢子形成量が非常に多く、病斑数が少ない場合でも大量の孢子を飛散する。このため、葉いもちが発生しているほ場では、薬剤防除を徹底するとともに、多発ほ場では穂肥を控えるのが望ましい。

ウ 穂いもちに対する薬剤防除を実施する場合、剤型によって散布時期が異なるので注意する。

粉剤は出穂期前、粒剤は出穂期2週間前に処理する。

エ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。

オ 農薬の使用および散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

## 2 セジロウンカ

### (1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年よりやや少

### (2) 予報の根拠

ア 7月5日半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

10株当たり払い落とし成幼虫数 11.4頭  
(平年 43.3頭、前年 18.5頭)

発生ほ場率 84.4% (平年 91.5%、前年 94.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 飛来量は地域による差が大きく、主要飛来の時期も地域により異なる場合があるため、ほ場における発生状況の把握に努める。

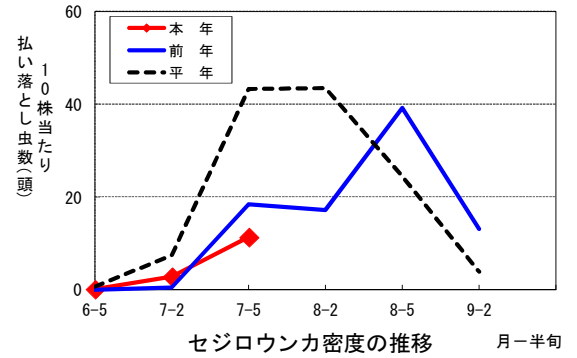
イ 幼穂形成期～穂揃期に多発して吸汁加害を受けると、下位茎葉の黄変枯死や出穂遅延、もみ数の減少など、被害が生じることがある。

発生状況を必ず確認して幼虫の発生密度が高い場合には、薬剤防除を実施する。

ウ 飼料用水稲では本種が増殖しやすいため、発生状況に注意する。

防除を実施する場合は、「稲発酵飼料生産・給与マニュアル」(稲発酵粗飼料推進協議会等編)、「多収米栽培マニュアル」(農林水産省)等に沿って行う。

エ 平成22年に本種によって媒介されるイネ南方黒すじ萎縮病の発生が確認されている(平成22年度 特殊報第3号 参照)ので、注意する。



## 3 トビイロウンカ

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

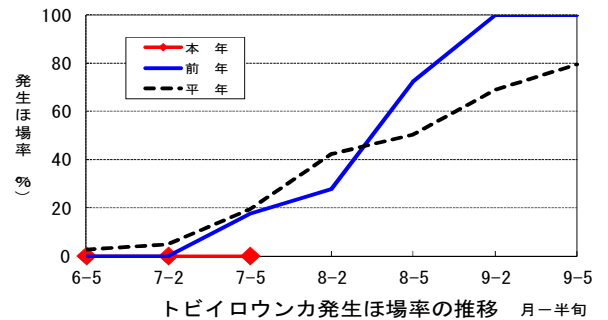
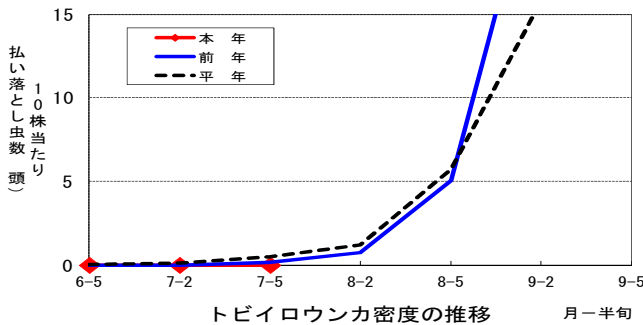
### (2) 予報の根拠

ア 7月5日半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

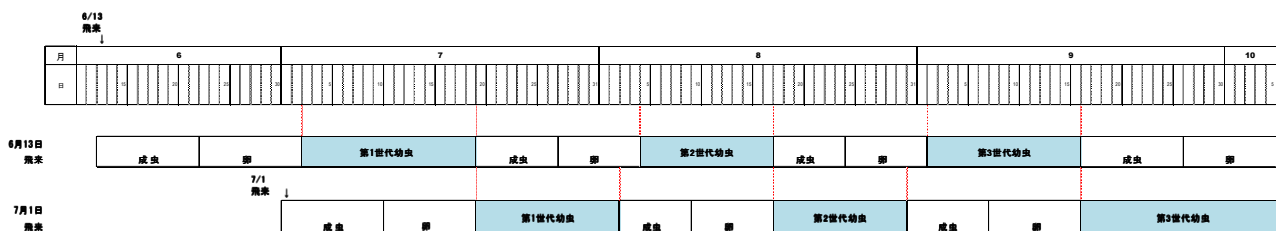
10株当たり払い落とし成幼虫数 0頭 (平年 0.48頭、前年 0.16頭)

発生ほ場率 0% (平年 19.3%、前年 17.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。



飛来に基づくトビイロウンカ発生予想パターン図 (平成27年7月28日作成)



(注) (1) JPP-NETの有効積算温度計算シミュレーションを用いて算出。発育零点 12.0℃、発育上限温度 28.5℃、発育停止温度 33.0℃、有効積算温度(成虫期間 100.0℃、卵期間 109.4℃、幼虫期間 189.4℃)

(2) 気温はアメダス太宰府を使用。7月27日までは太宰府実測値。28日以降は平年値を基に作成。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 飛来量は地域による差が大きく、飛来の時期も地域により異なる場合があるため、ほ場における発生状況の把握に努める。
- イ 発生初期には低密度でも急激に増加するため、前記発生パターン図を参考に、必ずほ場での発生状況を把握し、適期（若齢幼虫発生期）に防除を行う。
- ウ 育苗箱施薬剤を施用した場合でも、移植後1か月以上経過した水田においてはウンカ類が増殖しやすいので、十分注意する。
- エ 本種は株元に生息しているため、防除薬剤が株元に十分かかるように丁寧に散布する。
- オ 無人ヘリコプターによる防除を実施する場合は、気温が高くなる前の早朝や気温が下がった夕方に実施する。気温が高い時間帯に実施すると、薬剤の種類によってはイネの株元に到達する前に蒸発して防除効果が著しく低下することがある。

**※要防除水準（中老齢幼虫合計値で示す）**

飛来後第1世代：100株当たり 20頭以上（7月下～8月上旬頃）

飛来後第2世代：100株当たり 100頭以上（8月中～下旬頃）

飛来後第3世代：100株当たり 1,000頭以上（9月）

**4 コブノメイガ**

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年よりやや多

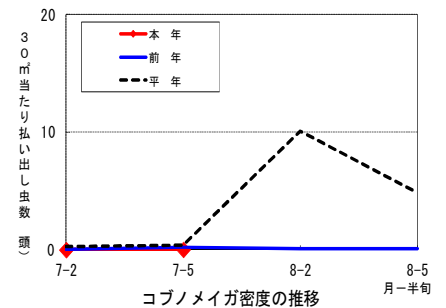
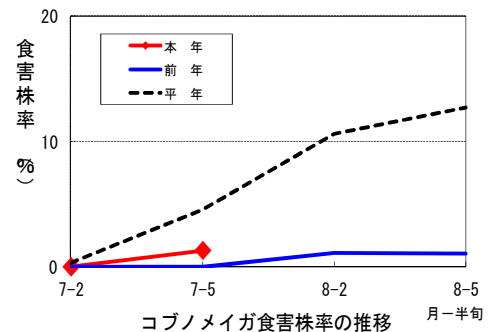
(2) 予報の根拠

- ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。  
 食害株率 1.3%（平年 4.5%、前年 0%）  
 発生ほ場率 17.4%（平年 37.6%、前年 0%）  
 30㎡当たり払出し成虫数 0.02頭  
 （平年 0.34頭、前年 0.22頭）

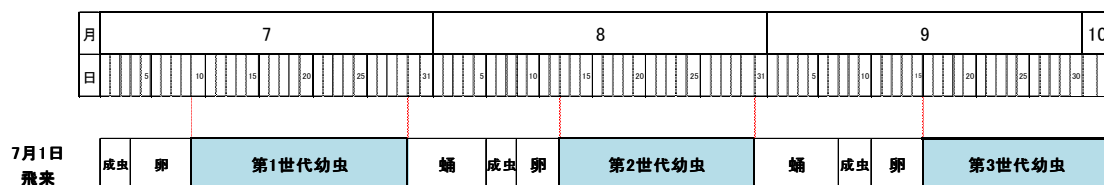
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除適期は、発蛾最盛期から1週間後である。
- イ 本種はウンカ類と同時期に飛来していると考えられるので、下記発生パターン図を参考に防除を行う。



飛来に基づくコブノメイガ発生予想パターン図（平成27年7月28日作成）



- (注) (1) 防除適期は発蛾最盛期から1週間後である。  
 (2) JPP-NETの有効積算温度計算シミュレーションを用いて算出。発育零点（卵 13.0℃、幼虫 12.5℃、蛹 14.2℃）、発育上限温度 28.5℃、発育停止温度 33.0℃、有効積算温度（卵 50.0℃、成虫 250.0℃、蛹 90.0℃）  
 (3) 気温はアメダス太宰府を使用。7月27日までは太宰府実測値。28日以降は平年値で予測。  
 (4) コブノメイガはウンカ類と同時期に飛来したと推定した。

## 5 斑点米カメムシ類

### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

### (2) 予報の根拠

ア 県下5か所の予察灯における、7月1半旬～5半旬までのミナミアオカメムシ、主要3種カメムシ、アカスジカスミカメの誘殺数は平年よりやや少なかった（－）。

ミナミアオカメムシ 17頭（平年53頭、前年59頭）

主要3種カメムシ<クモカメムシ、ホリカメムシ、シホカメムシ>

1頭（平年15頭、前年9頭）

アカスジカスミカメムシ 277頭（平年869頭、前年446頭）

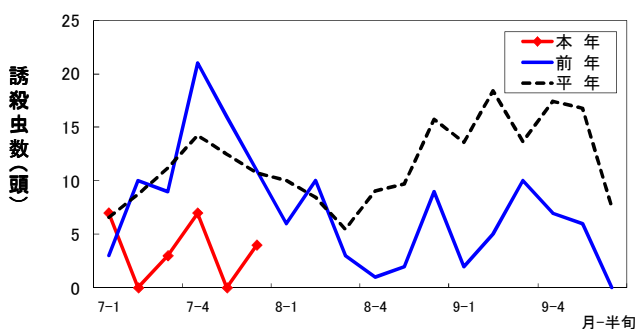
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

### (3) 防除上注意すべき事項

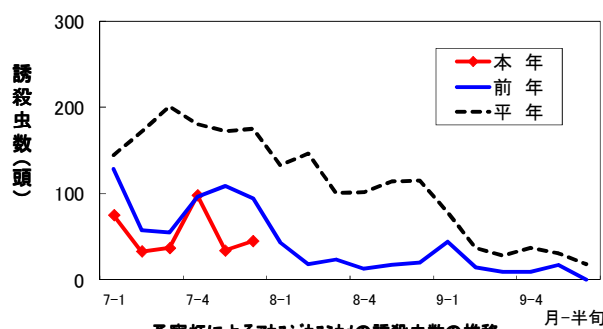
ア 畦畔や休耕田などの草刈を徹底し、出穂期2週間前までに終了する。

イ 防除時期は穂揃い7～10日後の1回を基本とする。

ウ 出穂期の早いほ場では集中的に加害される恐れがあるため、発生状況に注意する。



予察灯によるミナミアオカメムシの誘殺虫数の推移  
(県下5か所計)



予察灯によるアカスジカスミカメの誘殺虫数の推移  
(県下5か所計)

## 【普通作物：大豆】

### 1 ハスモンヨトウ

#### (1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

#### (2) 予報の根拠

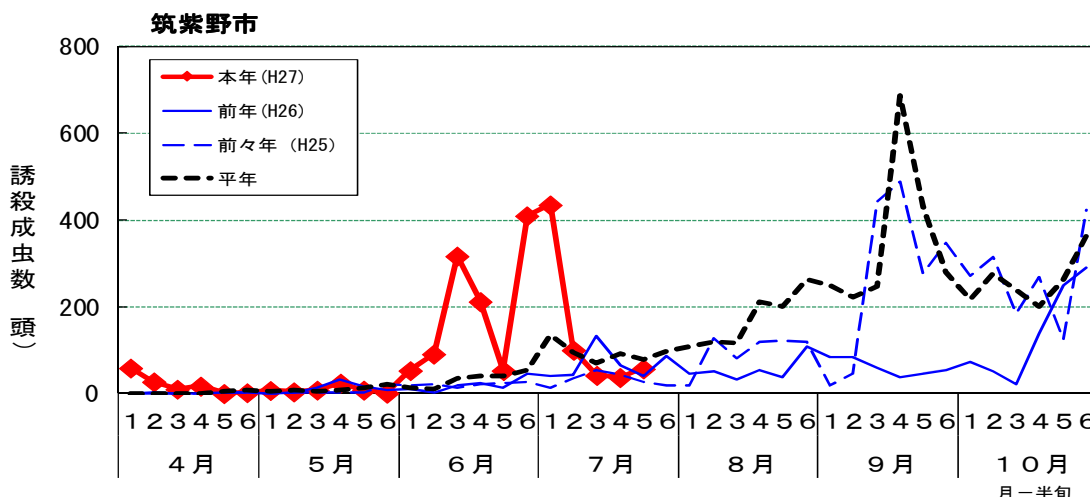
ア 7月1半旬までのフェロモントラップにおける誘殺虫数は平年・前年と比較して非常に多かったが、7月2半旬以降急激に減少し5半旬まで平年・前年並の誘殺数となっている（±）。

筑紫野市 7月1半旬 436頭（平年134頭、前年41頭）

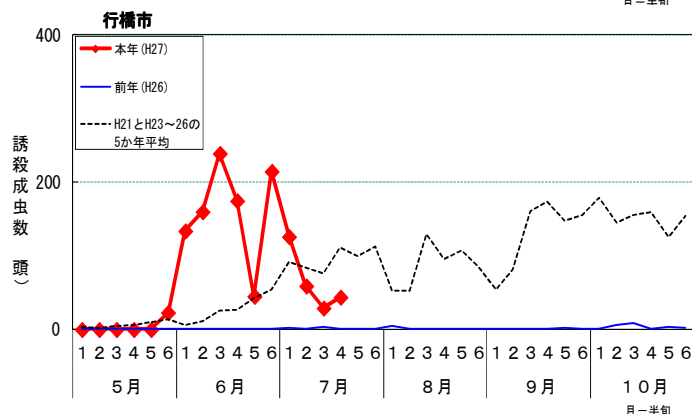
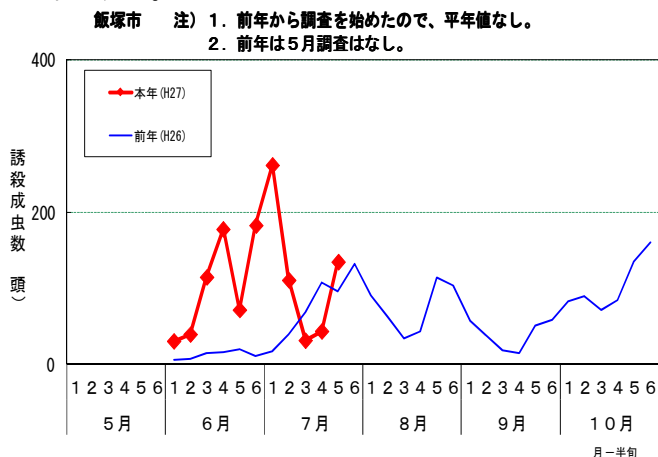
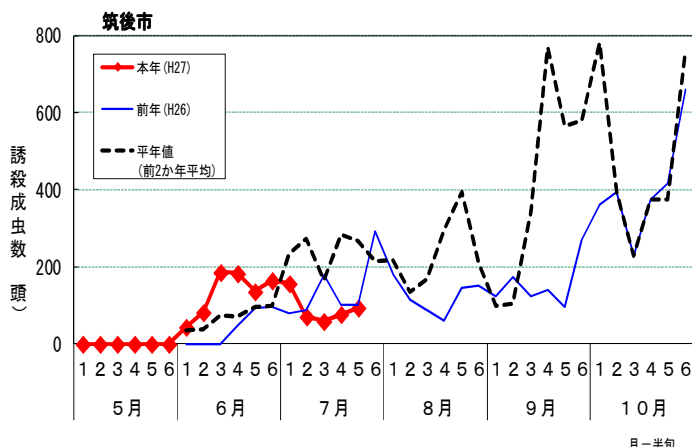
7月2半旬～5半旬 240頭（平年335頭、前年279頭）

イ 6月2半旬から7月1半旬までの間に多誘殺された成虫の次世代成虫の発生が見込まれる（+）。

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(参考) 下記地区は調査年数が2か年・5か年ため参考とする。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 分散前の若齢幼虫が群棲している白変葉は、見つけ次第除去する。
- イ 薬剤散布は、防除効果が高い若齢幼虫期に実施する。
- ウ 防除適期はフェロモントラップの誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって誘殺数に差があるため、ほ場で発生状況を必ず確認する。

【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 0.5% (平年 1.0%、前年 0.3%)

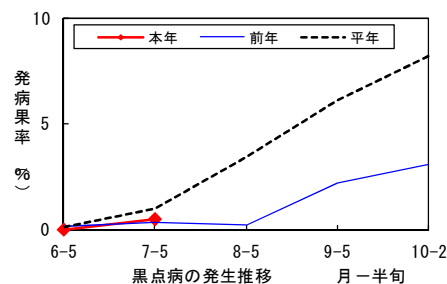
発生ほ場率 30.0% (平年 31.5%、前年 18.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



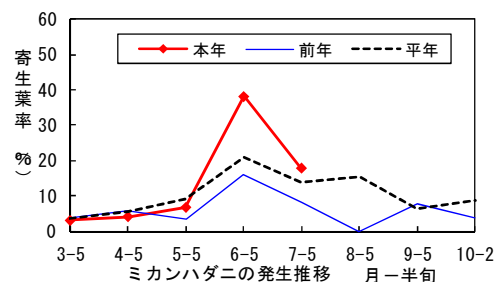
2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。



寄生葉率 17.9% (平年 13.8%、前年 8.1%)  
 発生ほ場率 81.8% (平年 65.0%、前年 63.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。
- イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

【果樹：なし】

1 ナシヒメシンクイ

(1) 予報の内容

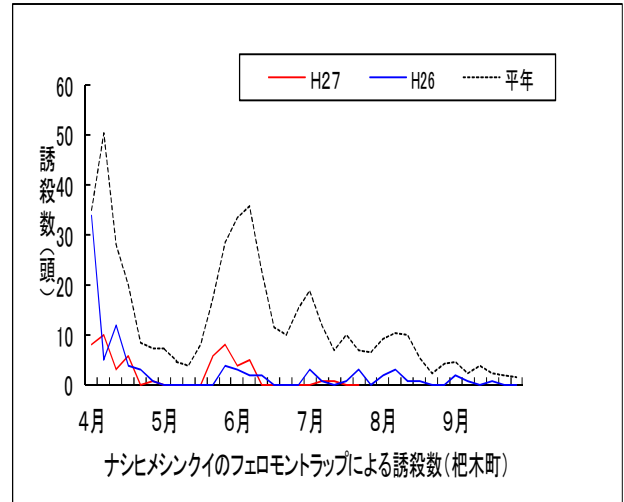
発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

7月1半旬～7月5半旬のフェロモントラップの誘殺虫数は、2頭(平年 55頭、前年 8頭)(地点名：朝倉市杷木町)で平年より少なかった(－)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 8月上旬～中旬頃の発蛾最盛期に防除を行うが、防除後も成虫が多くみられる場合は、1回目の防除の7～10日後に追加防除を行う。
- イ 幼虫は主に果頂部から食害侵入するので、防除にあたっては果実に薬液が十分かかるように散布する。
- ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

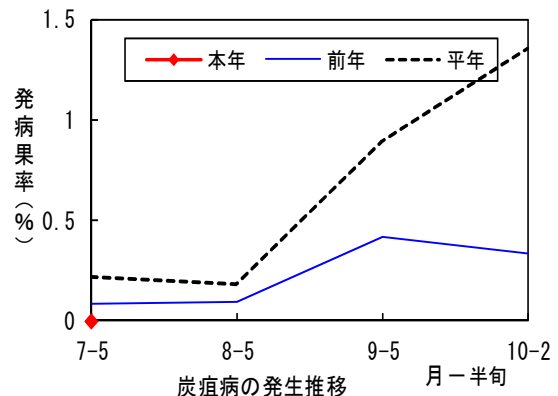
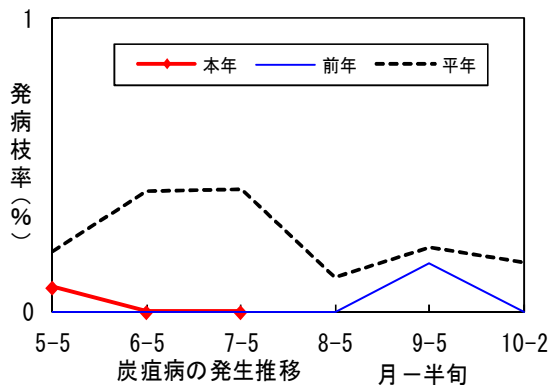
ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(－)。

発病枝率 0% (平年 0.4%、前年 0%)  
 発生ほ場率 0% (平年 20.3%、前年 0%)  
 発病果率 0% (平年 0.2%、前年 0.1%)  
 発生ほ場率 0% (平年 13.6%、前年 8.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

3) 防除上注意すべき事項

- ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。
- イ 連続降雨や前年の発生が多かった園では、薬剤防除を徹底する。



## 2 フジコナカイガラムシ

### (1) 予報の内容

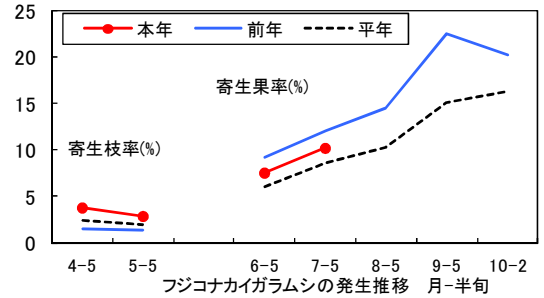
発生量：平年より多、前年並

### (2) 予報の根拠

7月5半月調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

寄生果率 10.3 % (平年 8.7%、前年 12.1%)

発生ほ場率 100 % (平年 81.9%、前年 91.7%)



### (3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので混み合った枝を整理し、散布むらがないよう丁寧に散布する。

イ 防除対策の詳細は、県ホームページに掲載している『病虫害・雑草防除の手引き』を参考にしてください。

URL : [http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/137505\\_50502708\\_misc.pdf](http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/137505_50502708_misc.pdf)

## 【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

### (1) 予報の内容

発生量：前年・前々年より少

### (2) 予報の根拠

ア チャバネアオカメムシの1㎡当たりの越冬量は平均0.9頭（前年4.8頭、前々年0.7頭）で、前年より少なかった(－)。

チャバネアオカメムシの越冬量およびヒノキ球果着生量の年次推移

	平成27年	平成26年	平成25年
越冬量(頭/㎡)	0.9	4.8	0.7
ヒノキ球果着生量	やや少	中	中

イ 7月1半月～4半月までの予察灯による誘殺虫数は、前年より少なかった(－)。

誘殺虫数 4頭（前年 30頭、前々年 5頭）（調査地点：うきは市）

5頭（前年 70頭、前々年 11頭）（調査地点：八女市）

ウ 7月1半月～4半月までのフェロモントラップでのチャバネアオカメムシの誘殺数は、33頭（前年10,030頭、前々年14頭）（調査地点：筑紫野市）と前年より少なく、前々年並であった。

エ 7月5半月の調査では、チャバネアオカメムシのヒノキ球果での寄生成幼虫数は、0.8頭（前年11.2頭、前々年3.1頭（1地点5枝、1枝当たり5回のたたき落としの合計））と前年・前々年より少なかった(－)。

オ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

### (3) 防除上注意すべき事項

平成27年7月31日27農林試第1971号技術情報第9号参照。

## 【果樹：その他の病虫害】

作物名 病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
なし ハダニ類	並	並	並	・多発生すると防除が困難になるので、発生が少ない時期の防除を徹底する。
かき うどんこ病	並	並	少	・うどんこ病多発園では8月下旬に防除を行う。
ハマキムシ類	少	少	並	・ハマキムシ類幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、薬剤はかかり



カキノヘタムシガ	並	並	並	ムラがないよう十分量を丁寧に散布する。 ・ハマキムシ類の発生が多い園では、8月上旬～中旬の防除を徹底する。 ・発生が多い園では、8月上～中旬の防除を徹底する。
----------	---	---	---	---

## 【茶】

### 1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

発病葉数 0.7葉 (平年1.8葉、前年0.2葉)

発生ほ場率 40.0% (平年28.2%、前年16.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

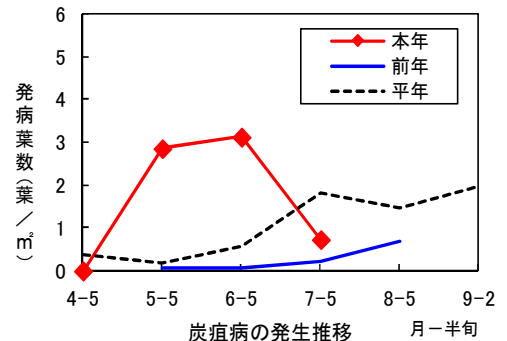
(3) 防除上注意すべき事項

ア 摘採・整枝後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。特に、最終摘採後の新芽(秋芽)に対する防除を行う。

イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、降雨前の防除効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



※ 前年の4-5は未調査。他のグラフも同様。

### 2 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

寄生葉率 0% (平年0.3%、前年0%)

50葉当たり虫数 0頭 (平年0.4頭、前年0頭)

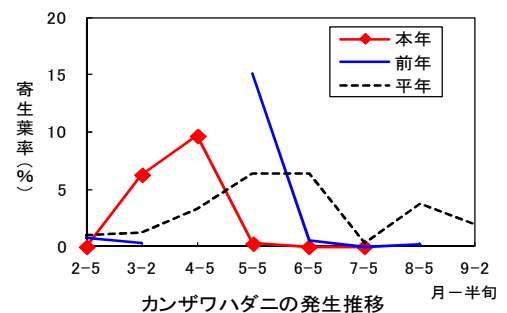
発生ほ場率 0% (平年8.5%、前年0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の茶園では、速やかに防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



### 3 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

被害葉数 0.2葉 (平年1.3葉、前年0.6葉)

発生ほ場率 30.0% (平年41.7%、前年50.0%)

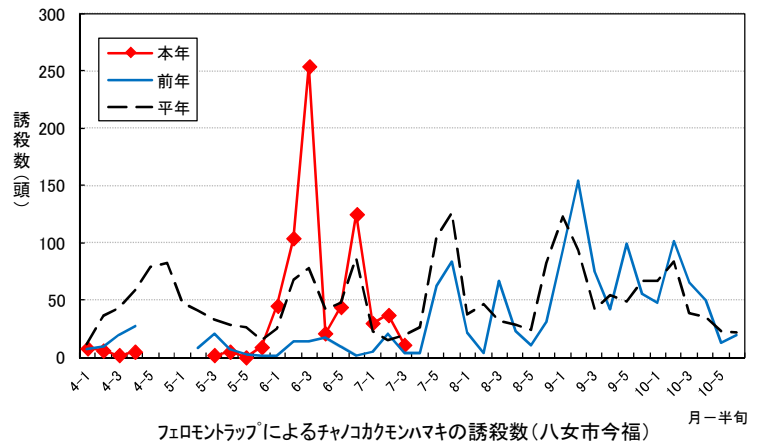
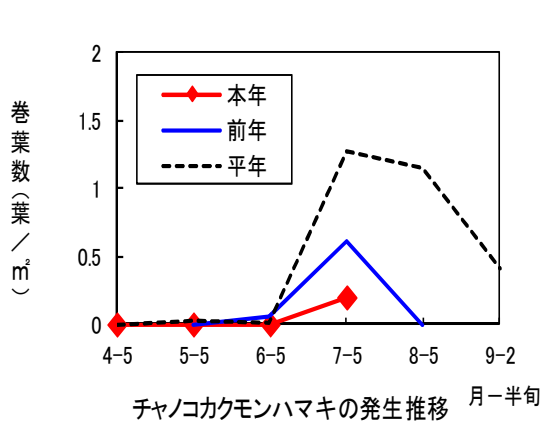
※一部のほ場で成虫が散見された。

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。



#### 4 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(ー)。

たたき落とし虫数 1.5頭(平年4.0頭、前年3.8頭)

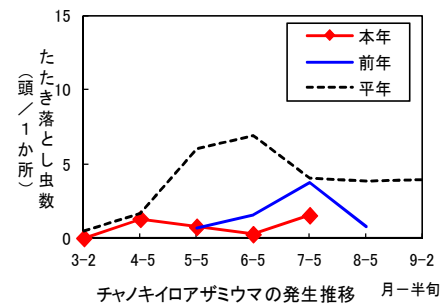
発生ほ場率 100%(平年76.0%、前年83.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生状況に留意し、たたき落とし(B5版上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。



※ 畝の雨落ち部4か所の枝をたたき、紙上に落ちた虫の数を平均。

#### 5 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。

たたき落とし虫数 1.0頭(平年0.7頭、前年0.9頭)

発生ほ場率 70.0%(平年56.8%、前年83.3%)

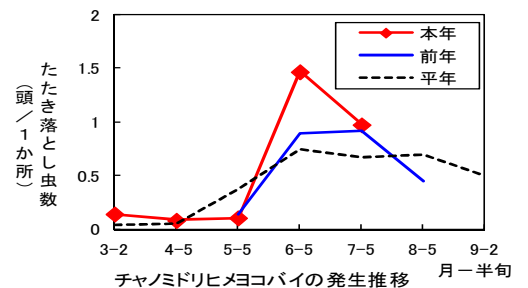
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア たたき落とし(B5版上)で4頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。

ウ 効果の高い薬剤が少ないので、多発する前に防除する。



※ 畝の雨落ち部4か所の枝をたたき、紙上に落ちた虫の数を平均。

#### 【茶：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
チャノホソガ	やや少	やや少	並	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。</li> <li>・巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。</li> </ul>

チャトゲコナ ジラミ	やや多 (前年比)	—	やや多	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防除適期は若齢幼虫期で（年3～4回発生）、第2世代幼虫の防除適期は、9月中旬以降と予想される。</li> <li>・虫の発生が確認できない園でも寄生している可能性が高いので防除を行う。</li> <li>・幼虫は葉裏に寄生しているため、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。</li> </ul>
---------------	--------------	---	-----	---

## 【野菜：冬春イチゴ（育苗期）】

### 1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

以下平成27年7月31日27農林試第1863号技術情報第8号参照。

### 2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（+）。

発病株率 9.7%（平年 2.3%、前年 1.8%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗の間隔を空け通風を図る。

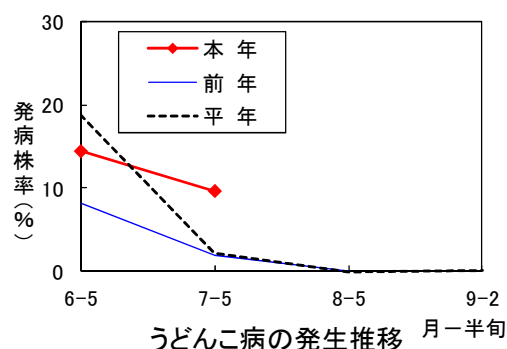
イ 発病葉の早期発見に努め、見つけ次第速やかに除去する。

ウ 夜冷短日や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に薬剤防除を徹底し、本ばに持ち込まないようにする。

エ 薬剤防除は下葉かぎ後に行うと効果的である。

また、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

オ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p13の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



※ 前年の9月2半旬調査は実施していない。

### 3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

寄生株率 1.1%（平年 8.0%、前年 1.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

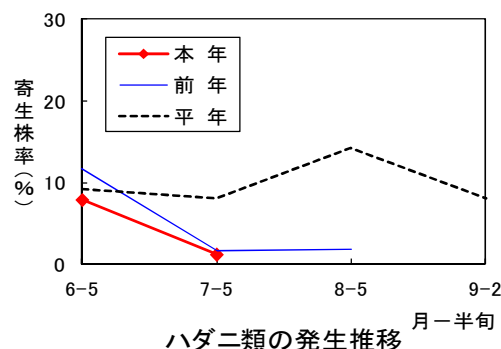
ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 摘葉した葉はほ場内に放置せず、ビニール袋等に入れて密封し、処分する。

ウ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

エ 抵抗性がつきやすいので、同一系統薬剤の連用は避ける。また、葉裏に農薬が付着するよう、下葉かぎ後に防除を行う。

オ 夜冷短日や低温暗黒処理を行う場合は、入庫前に防除を行い、本ばにハダニを持ち込まないようにする。

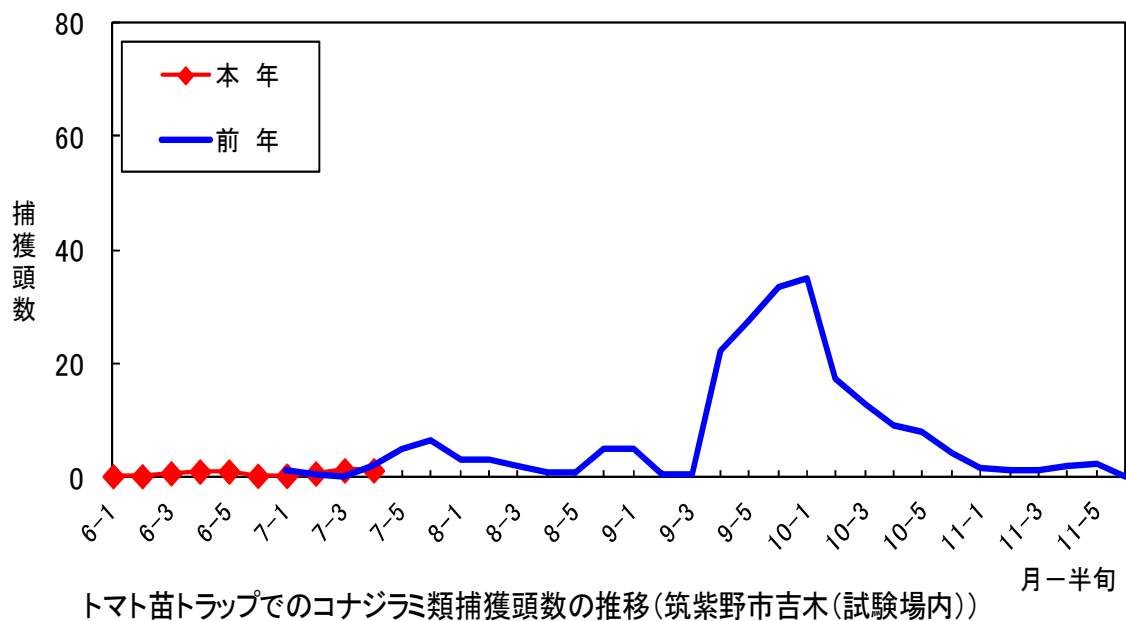
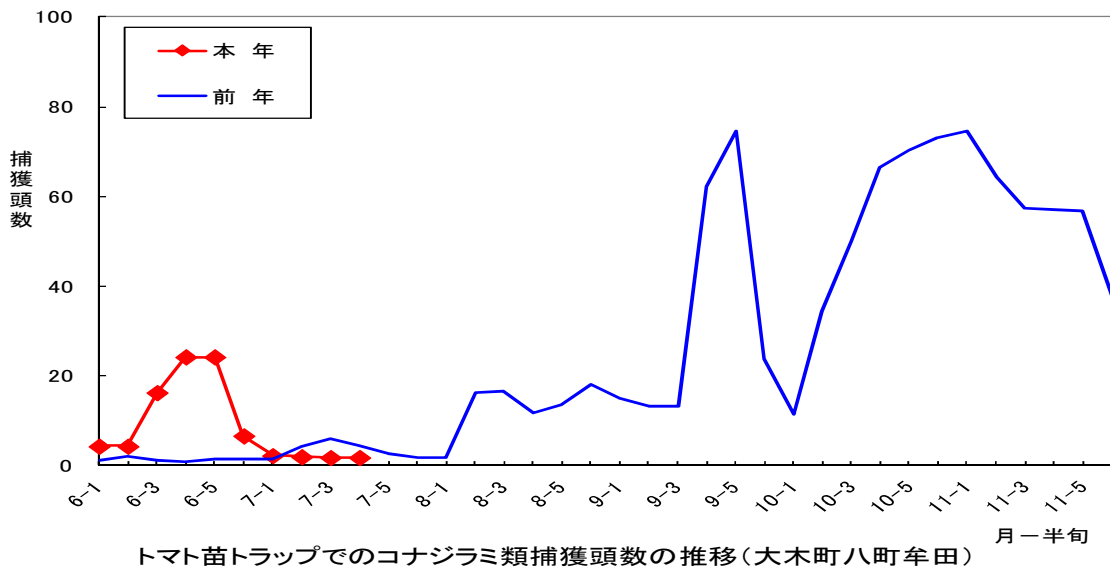


※ 前年の9月2半旬調査は実施していない。

【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (8月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
野菜共通 コナジラミ類	並	—	やや多	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 野外に設置したトマト苗トラップによる捕獲数は前年並であった。</li> <li>・ 前年8月は多雨であったため、本年は、今後前年よりも発生が増えると予想される。</li> <li>・ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照のこと。</li> </ul>

※ 現調査地点での調査は前年から実施しているので、平年比はなし。



# 農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

## 1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

## 2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

## 3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

## 4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

## 5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

## 6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しました。  
携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。



福岡県病害虫防除所